

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：37302

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20003

研究課題名（和文）英語のthere表現・場所句倒置表現の構文論的分析

研究課題名（英文）A Constructional Analysis of There Sentences and Locative Inversions

研究代表者

三野 貴志（Mino, Takashi）

長崎純心大学・人文学部・講師

研究者番号：50910048

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、特定の動詞・主語名詞を伴うthere構文の振る舞いを大規模コーパスから得られた実例に基づいて明らかにすることを目指した。特に本研究では、第二動詞にcomeを伴うthere接触節、goを伴う直示のthere構文、becomeを伴う存在のthere構文の分析を行なった。これらの表現に注目することで、there構文を分析する際には、動詞と名詞の両方に着目する必要があることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、これまで着目されていなかった表現を大規模コーパスを用いた詳細な語法研究を通して発掘することができたという記述的貢献が挙げられる。これまでのthere構文研究は少数の用例（研究者の作例）をもとに一般化がなされる傾向があった。本研究で得られた結果の中には、これまでの一般からは外れる用例も含まれており、再度、there構文で使用される動詞の種類や動詞と構文の繋がりを再検討する必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the behavior of there constructions with specific verbs and subject nouns, based on examples from large corpora. In particular, this study analyzed three types of there constructions: (1) there contact clauses with come as a second verb, (2) deictic there constructions with the verb go, and (3) existential there constructions with the verb become. By focusing on these expressions, I found that it is necessary to focus on both the verb and the noun when analyzing there constructions.

研究分野：英語学

キーワード：英語学 there構文 場所句倒置構文 構文文法

1. 研究開始当初の背景

従来、there 構文研究では、動詞・名詞の意味タイプ毎の振る舞いの特異性に関してほとんど指摘されてこなかった。一方、申請者は一見存在や出現を表さない周辺の動詞を伴う there 構文の詳細な研究を行い、これらの表現が示す他の there 構文や構成要素から完全には予測できない特徴を明らかにし、there 構文研究における動詞・名詞に着目する意義を示した。この手法を、周辺の動詞だけではなく典型的な存在・出現動詞を伴う用例に応用し、そこで得られた知見をこれまでの蓄積と比較することで there 構文の全体像を突き止められると考え本研究の着想に至った。

加えて、類似の機能を持つ場所句倒置構文と比較することで、これまでの研究結果が there 構文に特有なのか、それとも新情報を導入する倒置構文全般の特徴なのかを明らかにし、倒置構文研究への貢献ができると考えたことも、この研究に至った経緯である。

また、両構文を構文理論で分析する最新の研究は少数だが、特に there 構文は他の構文と比較して典型例である動詞 (be 動詞) に用例が異常に偏っており、具体的な用例の頻度や使用文脈を強調する使用依拠モデルを採る構文理論に有意義な貢献ができると考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は以下の2点の目的のもと実行された。

目的 A: 特定の動詞・主語名詞を伴う there 構文/場所句倒置構文の用法の記述・一般化

使用文脈と共起関係に注目し、特定の動詞・名詞を伴う表現の特性を分析する。特に、周辺の例がどう構文の機能を果たすか、各種の特殊な用法がどう語用論的に動機付けられるか検討する。また、両構文の共通点・相違点を突き止め、語用論的機能の違いから説明する。

目的 B: 構文理論でのネットワーク構築のあり方・構文間の関係性へのモデルケースを提示

抽象度の異なる構文の存在を強調し、その上で下位レベルの構文と上位レベルの構文の関係性を理論化する。加えて、構文の階層性だけでなく、典型的な構文と周辺の構文の関わり、動詞だけでなく名詞が果たす役割を捉える構文理論の模範例を提案する。

3. 研究の方法

本研究では、British National Corpus、Corpus of Contemporary American English、NOW Corpus などの大規模英語コーパスから収集した用例と英語母語話者へのインフォーマント調査を通して、一般動詞を伴う there 構文の調査を行なった。

まず動詞を指定した上で、there 構文の用例を収集し、その後名詞の種類毎に用例を分類した。必要に応じて、文脈情報を収集し、there 構文がどのように使用されているのかを調査した。

4. 研究成果

本研究では、there 接触節、go を伴う直示の there 構文、become を伴う存在の there 構文の分析を行なった。以下、順番に本研究で明らかになった内容をまとめる。

(A) there 接触節

現代英語では(1)のような主語の関係代名詞の省略は許されないが、there 構文では(2)のような省略例が用いられる。

(1) *The table stands in the corner has a broken leg.

(2) There 's a man with a Doberman comes around two or three times every night.

(BNC)

先行研究によると、(2)のような破格な there 構文の第二動詞として come や go が多く用いられる。しかし、come は一般的な there 構文でも使用できるため、わざわざ破格な there 構文を用いる動機は検討すべきであった。そこで本研究は第二要素に come を伴う there 構文の特徴を分析した。その結果、come を用いる一般的な there 構文では、主語名詞の多くが抽象名詞であるのに対して、(1)のような破格な there 構文は用例の約半数が人名詞であり、名詞選択に大きな違いがあることがわかった。特に、名詞の長さも非常に短く、主語が 2 語の例が多数派であった。さらに、第二動詞である come に後続する要素を調べたところ、to 不定詞や up や out などの不変化詞が多く後続し (一般的な there come 構文では見られない特徴)、全体として、名詞句要素を短く、動詞句要素を長くする傾向が観察された。つまり、(2)の破格な there 構文は文末焦点の法則に基づき選択されている可能性が示唆された。

(B) go を伴う直示の there 構文

先行事象もしくは先行発話を受けて評価的に用いられる there go の用例を大規模コーパスか

らの実例をもとに分析した。

- (3) “ I think it might be... blood. ” Amanda followed the spots to a set of stairs. Leah shook her head. “ There goes your overactive imagination again. ”
(COCA: FIC)

(3)のような用例を観察することを通して、(i)評価の there go の主語には先行事象・先行発話において象徴的な名詞（人・行為・発言）が生起し、主語として取り立てることで行為・発話に対する評価を表す、(ii) 評価の there go は対象となる行為にとって象徴的な人・活動・発言の出現を表す、という2点が明らかになった。

(C) become を伴う存在の there 構文

これまで十分な研究がなされてこなかった、(4)のような become を伴う there 構文の研究を行った。

- (4) There becomes a point in your band’s career where everything is a make or break situation.
(COCA)

この表現は、(i) 存在・出現を表さない動詞である become が用いられている、(ii) become が補語を伴っていない。という点で、異色な表現と言える。本研究では、大規模コーパスからの実例、英語母語話者へのインフォーマント調査を通して、become は状態変化を表す動詞であるが、構文全体として変化が出現と解釈されることによって、新情報の導入という there 構文の機能をうまく果たすことができるため容認される、と主張した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 MINO TAKASHI	4. 巻 7
2. 論文標題 A Brief Note on There Contact Clauses: With Special Focus on There Contact Clauses Selecting Come as the Second Verb	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知・機能言語学研究	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/88341	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三野貴志	4. 巻 29
2. 論文標題 先行事象・先行発話に対する評価を表すThere go	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 英語語法文法研究	6. 最初と最後の頁 100-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------